

資料4

シンボル生成と理解の原理：ヒト以外の
霊長類とヒトとの比較

鈴木佑治（慶応義塾大 言語情報学）14

ヒトの言語使用の場合、言語固有の意味に話者／聞き手の態度が微妙に付加され字義以上の間接的意味が伝達される。この話者／聞き手の態度はそれに介在する状況に比例して複雑さの度合いは増す。ヒトの社会心理的状況は複雑で、それにともない言語に託される間接的な意味も必然的に繁雑である。ジョージア大学のポノボの「カンジ」は、「I have a lighter in my pocket. You can take it out.」に対して、字義ではなく「話者のポケットのライターを取り出し薪に火をつけよ」という間接的にしか伝達されない依頼に反応した行動をする。字義を理解し状況を判断した上で話者の意図を推量した結果であるのか、即ち、H. P. GriceのいうCooperative Principleのような原理が作用した結果なのか、あるいは、この一連の行動は、ハイコンテクスト化されたルーティンで、パターン化された刺激と反応と同列のものともみなすべきなのか、ポノボやチンパンジーのコミュニケーション能力およびそれに付随する知的能力を測定する上で2通りの解釈が存在する。チンパンジー「アイ」の言語学習の成果から推察するに、ポノボの「カンジ」も、使用する700余の言語表現の字義を理解し、その場の状況と話者の態度を理解し発話の字義にはのめかされた意図を汲み取る高度な判断能力を有している可能性は高い。本年度はこのように、言語の法性と言語行為論を中心とした語用論的見地より、ヒト以外の霊長類の言語使用を分析した。

資料6

PCR法を用いた霊長類動物の性別およびABO式血液型についての検討

林子清, 南野友義, 高安達典, 大島 徹
(金沢大・医・法医), 竹中 修 (京大・
霊長研・分子生理)

京都大学霊長類研究所から提供された9種類計18頭の霊長類動物（チンパンジー2頭、シロテテナガザル2頭、マントヒヒ2頭、ニホンザル2頭、カニクイザル2頭、アカゲザル2頭、ミドリザル3頭、フサオマキザル2頭、ワタボウシタマリン1頭）の血液から抽出されたDNAを試料とし、ヒトの性染色体特異的なプライマー（X1+X2：X染色体特異的なプライマー；Y11+Y22：Y染色体特異的なプライマー）を用いて、PCRを行い、性別判定を試みた。さらに、ヒトのABO式血液型遺伝子特異的なプライマー1f+1rおよび3f+3rを用いて、PCR-RFLP法でABO式血液型の遺伝子型判定を試みた。その結果、性別判定用のプライマーを用いて増幅したところ、チンパンジー、シロテテナガザル、マントヒヒおよびニホンザルでは、ヒトと同じ長さ（X染色体特異的な断片：130bp、Y染色体特異的な断片：170bp）のDNA断片が増幅されたが、いずれの動物でも雌雄に関係なく、XおよびY染色体由来の2本のバンドが検出されたため、性別判定は不可能であった。また、上記4種以外の霊長類動物ではヒトと同じ長さのDNA断片は増幅されなかった。また、ABO式血液型の遺伝子型判定においては、試料とした2頭のチンパンジーでは、ヒトのAA型のバンドパターンに類似し、2頭のシロテテナガザルでは、ヒトのBO型に類似していた。他の霊長類については、ヒトと同じ長さのDNA断片が増幅されたが、制限酵素の切断パターンはヒトのそれと異なっていたため、その遺伝子型判定は不可能であった。